

西宮市立小学校校歌の中の山と川をめぐる環境教育の可能性
－環境学習材の視点から－

The Possibility of Environmental Education over the Mountains and Rivers in a
Nishinomiya Municipal Elementary School Song :
from the Point of View of the Environment Learning Material

古岡 俊之

FURUOKA Toshiyuki

武庫川女子大学 学校教育センター年報

第2号 2017年

【研究報告】

西宮市立小学校校歌の中の山と川をめぐる環境教育の可能性 —環境学習材の視点から—

The Possibility of Environmental Education over the Mountains and Rivers in a Nishinomiya Municipal Elementary School Song : from the Point of View of the Environment Learning Material

古岡俊之*

FURUOKA, Toshiyuki

要旨

西宮市立小学校の「学校要覧」平成 20 年度版に掲載されている「校歌」を利用して、西宮市の公立小学校の校歌にうたわれている山と川について、特に地理的分布について検討した。この結果、山については六甲山、甲山のように地域を代表するような周囲から高く突き出した、目立った山が取り上げられ、取り上げられている山の数は少ない。これに対して、川は身近な自然として取り上げられる傾向にあり、したがって小学校に近接した川がうたわれる。武庫川はその好例である。環境教育の視点から教材化を期待している。脈々とうたい継がれてきた校歌は、児童に校区周辺の自然環境への関心や意識を高めているものと思われる。校歌詞の中から、山・川のみに限らず、児童の身の回りの環境にわたり、自然的・人文的環境の言葉を広く求めて、人々の生活とその地域の自然・風土とが深くかかわりあっていることを環境教育に生かしていきたいと考える。

キーワード：小学校校歌 自然 六甲山 武庫川 環境要素

1 環境要素と校歌

毎年夏の甲子園では、地方予選を勝ち抜いてきた高校野球チームが熱戦を繰り広げる。勝利を収めた高校の栄誉を称え、校旗が掲揚され校歌が斉唱される。選手も応援団も声高らかに校歌をうたう。

校歌の響きは、聞く人のそれぞれの心に感懐を呼び覚ますことは誰しも経験しているに違いない。懐かしい校舎、優しく教え諭してくださった先生方、親しく遊んだ友人など、幼かった遠い日々への追憶がそうさせる。

校歌の歌詞を口ずさむと、必ずといっていいほど表れる言葉に「山」や「川」がある。それらはとりもなおさず、その地域に住む人々の郷土の誇りであり象徴であり故郷そのものなのだからだろう。

ところで4年に一度、しかも夏のオリンピックが開催される年に、著者の卒業した中学校の同窓会がある。閉会近くなると必ず「みんなで校歌をうたいましょうよ」と提案される。

1 連なる嶺に 春霞 棚引く里は 照り映えて

常盤の松の 暎ゆる時 雄々しく誇る

学び舎に 世紀の華を 咲かせなむ

いざ立て いざ立て 小代中学校

2 内倉山の もみじ葉に あかねの夕日

映ゆる時 若き血潮の 感激に

* 学校教育センター特任教授

栄えゆく日本の礎と 文化の扉 開かなむ

いざ立て いざ立て 小代中学校

3 熱田の里に 湧き出でて 流れたゆまぬ

矢田川の 盡きせぬ理想の 水汲みて

知性を磨き 身を鍛え 平和の道を 歩まなむ

伸びよ 伸びよ 小代中学校

1番の最初の歌詞の「連なる嶺」は鉢伏山・氷ノ山であり、3番の「熱田の里」は名牛「神戸牛・松阪牛」の種牛「熱田蔓(あつたづる)」の故郷である。私が一番好きなのは2番の歌詞である。放課後、夕日が内倉山に沈む頃まで、へとへとになるまで卓球に汗を流した日のことが忘れられない。内倉山は私の心の癒しでもある。校歌研究の動機となったのは『小代中学校校歌』^①であった。

著者の勤務する本学の所在地西宮市では、公立小学校の校歌の中にどのような山や川がうたいこまれているだろうか。また、その範囲はどの程度の広がりにあるのだろうか。校歌の歌詞に取り上げられている環境要素を、山、川、平野、海洋、気候、動植物、産業・交通、歴史的背景に分けて集計すると、山が最も多く川がそれに次いで多い。

西宮市の各公立小学校の「学校要覧」^②に基づき、歌詞のうち山と川を取り上げて地理学の観点から考察する。山と川以外にも歌詞に見られる動植物等に触れ、その意味を明らかにしていくのも興味あることかと思うが、本論では環境学習材としての可能性について、特に環境意識を培う環境教育の視点から山と川に限定して考えてみたい。

※ この論文では、環境教育・環境学習という用語を主として以下のように用いている。

環境教育……学校や指導者などにおける意図的・計画的な環境に関する指導

環境学習……学習者の主体的な学びを意識した環境に関する学習

2 研究の目的

本研究は、兵庫県西宮市の公立小学校の校歌をとりあげ、地理学の観点から歌詞の分析を試みた。校歌を分析してみると、その学校がどのような場所、環境の中にあるか、またどのような教育目標が織り込まれているのかがわかる。校歌の歌詞の中の「山」「川」の環境要素から、西宮市の地理的環境を、環境教育、特に環境意識を培う視点から、小学校における環境学習材の可能性について考察することにした。

3 わが国における環境教育の推進に向けての取組

わが国では、1998(平成元)年に幼稚園教育要領や小学校学習指導要領が改訂され、学校教育に正式に位置づけられるようになった。そして、1992(平成4)年に文部省は、「環境教育指導資料(小学校編)」を、次いで1995(平成7)年、事例集を作成し、学校教育での環境教育を推進させるための施策を打ち出した。1996(平成8)年には、中央教育審議会第一次答申において「環境問題と教育」の章が設けられ、環境教育の必要性和重要性について、①環境から学ぶ ②環境について学ぶ ③環境のために学ぶ、の三つが示された。

西宮市では2002(平成14)年、行政方針の冒頭に今後の年目標として「環境学習都市・にしのみや」を打ち出した。2003(平成15)年に環境学習都市宣言をし、市民が主体となって、六甲山系の緑の山並

み、武庫川・夙川などの美しい河川、大阪湾に残された貴重な甲子園浜・香櫨園浜をはじめとした豊かな自然を守るとともに、公害問題にも取り組むなど、良好な環境をもつ都市を目指した。

2014(平成26)年10月、国(国立教育政策研究所教育課程研究センター)は、先の「環境教育指導資料(小学校編)」を改訂し小学校環境教育のねらいを次の三点とした。⁽³⁾

① 環境に対する豊かな感受性の育成

自分自身を取り巻くすべての環境に関する事物・現象に対して、興味・関心をもち、意欲的に関わり、環境に対する豊かな感受性をもつことができる。

② 環境に関する見方や考え方の育成

身近な環境や様々な自然、社会の事物・現象の中から自ら問題を見付けて解決していく問題解決の能力と、その過程を通して獲得することができる知識や技能を身に付けることによって、環境に関する見方や考え方を育むようにする。

③ 環境に働きかける実践力の育成

持続可能な社会の構築に向けて、自ら責任ある行動を取り、協力して問題を解決していく実践力を培うようにする。

その後もわが国の環境教育の推進等については、「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律の一部を改正する法律」の公布・施行や、国連「持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」の動き、学習指導要領改訂による環境教育に関する学習内容についての一層の充実など、様々な施策及び取組がなされてきている。

4 西宮市の概要

(1) 市域

西宮市は1925(大正14)年に市制を施行し、現在は兵庫県内3位の人口約49万人(平成28年10月1日現在)を擁する中核市である。面積100平方キロ。地理的位置は兵庫県の南東部、大阪湾に臨んで阪神地域のほぼ中央を占め、大阪市の中心部へ約15キロ、神戸市の中心部へ16キロで、ほぼその中間にあたる。

市域の東は武庫川下流をはさんで尼崎市と接し、中央のえぐれた部分が仁川及び武庫川上流で宝塚市に接している。西は西部で堀切川を境に芦屋市に臨んでいるが、北部の山岳地帯では神戸市に接して西から北に及んでいる。南は「武庫の海」の大阪湾である。市域の南半分は、まさに阪神回廊地帯にある。東に広々とした平野をもち、西は狭い海岸沿いの平野とともに大地・丘陵の交錯する山岳地帯を抱いて、重要な位置にある。したがって東から来る交通路も古来、西宮に一端集中し、ここから西に走り、あるいは北に向かって六甲山地を迂回する。地形的には隣接都市と一連であるが、全市域に属する範囲は次のように分類できる。

・山地 68.84 km²(市域の71.3%) ・平地 27.40 km²(市域の28.4%) ・池沼 3.35 km²(市域の0.3%)

また、山地も、その中に台地・丘陵がかなりの面積を占めているので、著しい高度は示さず、最高も840mにとどまる。平地の低いところでは0.4mの高さである。

河川は大別して武庫川とその支流及びこれと別個に大阪湾に注ぐ河川に分けられる。武庫川本流は市域の東の境を区切り、支流仁川は宝塚市との境界をなしている。また北部の山地には名塩川・太多田川が東へ向かって流れ、有馬川・船坂川が市域の北部を大きく迂回して北へ向かって流れ、大阪湾に注ぐもので、東川(上流では御手洗川、また分流に津門川)・夙川・堀切川がこれである。⁽⁴⁾

(2) 自然的条件から見た地理区

地形を中心に考えると、①平野地区、②台地・丘陵地区、③山岳地区に区分される。平野地区とは等高線 20m 以下の平地をさし、台地・丘陵地区は平野地区に接し、山岳地区のすそを取り囲む 70m 前後までの平坦地または緩やかな傾斜地であり、部分的にはそうした緩やかな傾斜地が 70~100m の高さにまで達するところがある。

山岳地区は等高線で 70~100m 以上の範囲をさすが、地形の上から見て決して傾斜ではなく緩急様々な姿がみられる。特に高度 200~300m に及ぶ付近には、極めて緩やかな傾斜のところがある。柏堂、鷲林寺の一带と、名来、上山口・下山口・中野を含む細長い地区がこの例である。

地形にもとづく以上の3つの自然条件から見た地理区も、本市の中央を貫く六甲山地の重要性に着目すると、大きく①六甲山南側と②六甲山北側に区分される。その境界は山岳中の分水嶺にあるから、平野、台地、丘陵地区はすべて六甲山南側に入り、山岳地区が同南側と同北側の二つの地方にまたがる。⁵⁾ 自然環境としては、なんとといっても山と川、海に囲まれたすばらしい空間といえる。

5 校歌に見られる地域の風景を表す表現

著者の勤務する本学の北側に位置する小松小学校の校歌をみると、「空すみわたる 六甲の やまなみ四季の色はえて…」(1番)「流れ絶えせぬ 武庫川に…」(2番)というように西宮市を含む阪神地域を代表する六甲山、武庫川が校歌にうたわれている。これは西宮市のシンボリック風景の一つと考えられる。このことから地域を代表するシンボリック風景について、西宮市ではどのような表現が校歌にうたわれているかと分析してみた。学校数は40校(平成20年3月現在)。これらの校歌詞から山地、河川など環境要素に準じた言葉を抽出し、その割合を環境要素別に表してみると<表1>のようになる。

表1 環境要素別校歌詞数の割合(西宮市) N=40

学校数	環境要素別校歌詞数の割合(%)														
	山	地	河	川	平	野	海	洋	気	候	動	植	物	太	陽
40校	80.0	47.5	20.0	37.5	45.0	25.0	5.0								

6 西宮市立小学校校歌詞に歌われている山地と特徴

西宮市立の各小学校がどの山を校歌の歌詞に取り上げているかをいくつか例示する(図1)。

最も多くの校歌詞に取り上げられているのは六甲山(21校)で群を抜いている。それに次ぐのが甲山(9校)である。それ以外に、丸山、船坂山、青垣山、愛宕山(各1校)などがある。

以下、これらの山地のうち六甲山と甲山、そして丸山について校歌詞の例、山地の特色を述べる。

(1) 六甲山(931m)

[校数] 21校(西宮浜・浜脇・香櫨園・夙川・苦楽園・大社・広田・平木・高木・深津・瓦林・上甲子園・用海・甲子園浜・高須東・高須南・高須西・鳴尾東・小松・北六甲台・東山台の各小学校)

六甲山は、六甲連山または六甲山地と呼ばれる連峰中の最高地点をいう。標高 931.3m、長さ約 30 kmの山地である。連峰全体からはやや東寄りに当たる。地名は古代、難波の津の西方一体は大きく湾入し、難波から見て対岸にあるところから<ムコ>と呼ばれていたと考えられ、それに武庫、務古、牟古、武古などの字が当てられているが、一般的には武庫が多く用いられた。そこにある港を<武庫

の津>と呼び、背後にそびえる山をムコ山と称した。中世に六甲の字が当てられるに至り、明治以後、
 <ロッコウサン>という近代的発音に変わったと言われている。(6)

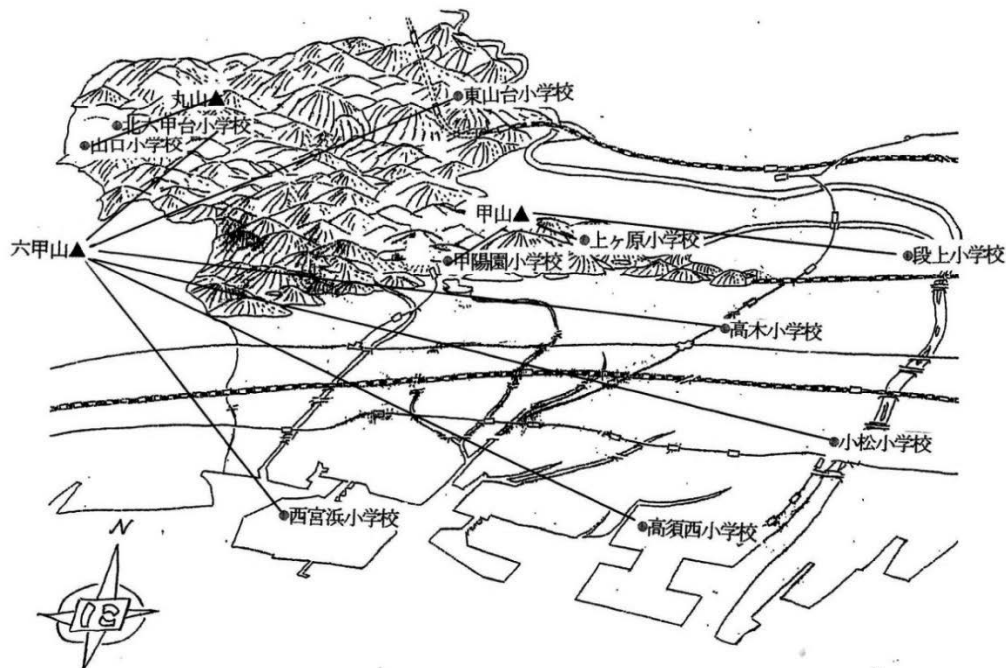


図1 西宮市立の小学校校歌にうたわれている山(古岡俊之原図)

六甲山地は、非常に長期間にわたって働いた東西方向の圧縮力の下、地下の花崗岩が徐々に押し上げられて作られた。その際、山地の東方で高く、西の方で低い形に傾き上がった。すなわち傾動隆起してできあがった山が六甲山である。

その押し上げに伴って、岩石中にたくさんの割れ目ができる。その大きな割れ目が断層である。六甲山は地史的には非常に新しい山なので、その山を作るのに関係した断層も新しく、阪神・淡路大震災で有名になった活断層が非常に多い。

西端は須磨、塩屋の岸から東は武庫川右岸に至っている。東西約30km、南北約10kmにわたる。花崗岩を主とし、石英粗面岩、古生層、第三紀その他の地塊から成る山地で瀬戸内海国立公園に属している。山頂部の隆起準平原面上は、その高さ、平坦さを利用したホテルや保養所、ゴルフ場、人工スキー場等がある。(7) 校歌詞の例を以下に示す<表2>。

表2 六甲山に係る校歌詞の例

(順不同)

歌番	六甲山を含む校歌詞	学校名	歌番	六甲山を含む校歌詞	学校名
1番	六甲の峰は たおやかに	西宮浜小	2番	六甲連峰の 雄々しさを	高須西小
1番	六甲の 山なみ四季に 色はえて	小松小	2番	六甲の 山なみはるか 仰ぎみて	北六甲台小
3番	緑なす六甲の山に美しき共生の丘	東山台小	1番	六甲の 山の姿を 仰ぎ見よ	高木小

(2) 甲山 (389m)

[校数] 9校 (段上・神原・甲陽園・平木・甲東・上ヶ原・上ヶ原南・北夙川・津門の各小学校)

六甲山地の東端にある北山山塊 (平均高度 200m) の真ん中に、おわんを伏せたような形で突き出

した甲山（標高 309.4m）は古くから人に、魅惑の山として親しまれている。

六甲山地の山々は御影石の名で知られている花崗岩で構成されているが、甲山は黒っぽい安山岩でできているので周辺の山々と違う山容を呈している。甲山の石を薄片にして顕微鏡で見ると、半透明なガラス質と多量の磁鉄鉱の粒からなる石基中に、多量の斜方輝石と斜長石の針状結晶が認められる。その性質は、大和の二上山、四国の屋島・国府台などで、石器の素材となっているサヌカイトに共通するものがある。兵庫県下には安山岩は各地にあるが、サヌカイトは甲山だけである。

甲山付近では、基盤の六甲花崗岩を貫く露頭がみられ、神呪寺東方 500mの大阪層群下部の砂礫層の中には、甲山安山岩礫を多量に含んでいることから、大阪層群下部堆積当時(約 200 万年前)には、甲山の原型が削られていた。

二上山などで、サヌカイトの絶対年代測定が行われ、約 1,500 万年前という結果が出ている。甲山も、そのころ六甲花崗岩を貫いて地表に出現したが、当時の火山地形は安山岩の粘性から考えて、なだらかに山麓の広がった山容であったと推定される。甲山火山の誕生後、長い長い年月の間に雨や風が甲山火山の上の部分を取り崩していった。元の火山体は完全に削り取られ、現在火道部が露出し、周辺の花崗岩より侵食に対する抵抗が強いため、円頂丘の地形が突き出すようになった地形である。それが 300 万年ほど前から、土地が沈みはじめ、海の表面より低くなり、30 万年ほど前からまた、土地が隆起し始め今の高さになったようだ。その後も海水面が 100m 近くも下がったり（氷期）、地球が暖かくなって、海水面が甲山の麓まで上がったりしながら今のような海水面になった。⁽⁸⁾ 校歌詞には下表<表 3>のように表現されている。

表 3 甲山に係る校歌詞の例

(順不同)

歌番	甲山を含む校歌詞	学校名	歌番	甲山を含む校歌詞	学校名
1 番	甲山 まるくあかるく ちちははの 顔にかさなり	段上小	3 番	山はかぶとの かぶとの山は 星と雲との かなたを語る	上ヶ原小
1 番	甲の山が よびかける よびかける	甲陽園小			

(3) 丸山 (378m)

〔校数〕 1 校 (山口小学校)

【校歌詞】 いつも見あげる 丸山が 長い歴史を 知っている…

丸山は標高 378m。その名の通り丸く美しい形をした小山で、丸山ダムをはさんで畑山の連山と向き合っている。頂上近くにある神社は 19 世紀中頃に京都伏見稻荷大社から分霊されたといわれる丸山稻荷神社である。山頂からは水源地金仙寺湖をはじめ北六甲台、山口町一円が眺望できる。

この山は中世室町時代、かつてこの地方を領地とした山口五郎左衛門氏の居城跡とも伝えられている。麓の金仙寺は山口氏菩提寺として建立された。山口氏の滅亡とともにその伽藍も失われ、難を逃れたという観世音菩薩像が今に伝えられ、観音堂に安置されている。⁽⁹⁾

7 山の自然を守る

山は、第一に、そこに住む人々にとっての生活の場として重要である。さらに、遠く離れた都市に住む人々にとっても、水源地としての重要性を渇水のたびに認識させられる。

ところが、35年くらい前から山地での自然破壊がすさまじい勢いで始まった。スキー場、林道という名の観光道路、外国資本による大規模な観光・リゾート施設の計画が目白押しで次々に実施されてきた。ゴルフ場や住宅団地も丘陵地から山地へ這い上がる始末である。今や、里山などで太陽光発電施設の建設も各地で進み広範囲にわたって森林が伐採され、景観悪化や土砂崩れなどで災害の恐れがある。このままでは、日本の山は山肌が露出し切り刻まれた姿ばかりが目にとまるようになる。

しかし、山の自然を守るためには、山の自然そのものをもっと知らなければならない。本学学校教育センター7階の窓越しに見える六甲山の中腹に1条の赤茶けた部分が横たわっている。これは山の向こうの街へつながる林道であるという。また、同時に山頂に林立する通信・テレビ用のアンテナのある所へかよふための道である。道の下のがけはあちこちで崩れそうになっている。道をつくるという一つの行為が他にどう影響を与え、山全体がどうなるかを考えてのことであつて欲しい。

このような環境問題を認識するために学校では、まず身近な問題から取り上げて、興味・関心をもたせることが重要である。児童の発達に応じて、それが地球規模の問題につながっていることや地域的な広がりをもつようになっていることを認識させるとともに、それらの問題が相互に深く関わっていることを理解させるなど、多層な環境問題を総合的に把握する必要を感じ、それを捉えさせることが大切である。⁽⁹⁾ このあたりが、現在、学校教育に課せられた問題であり、最近、総合的、全体的、関連的にとらえる方法が取り入れられているゆえんである。

8 西宮市立小学校校歌にうたわれている川と特徴

次に西宮市立の各小学校の校歌の詞に、どの川がうたわれているかを図示する（図2）。

最も多くの校歌に取り上げられているのは武庫川（16校）である。これに次ぐのが御手洗川だが2校と少ない。あと、夙川、有馬川、名塩川（各1校）などがある。これらの河川について校歌歌詞の例、河川の特徴を述べる。

(1) 武庫川

〔校数〕 16校（甲東・瓦林・段上・樋ノ口・高木・上甲子園・鳴尾・甲子園浜・高須東・高須南・高須西・鳴尾東・鳴尾北・小松・名塩・生瀬の各小学校）

武庫川は、武庫川水系の本流であり、全長 65 km、流域面積 496 km²を持つ兵庫県下第6位の河川であり、武庫平野の形成に大きな役割を演じてきた。地形面だけでなく、農業用水や飲料水として恩恵を与え、現在では尼崎・伊丹・宝塚との市境の役目をはたしている。武庫川は、篠山盆地の南方から源を発して流れてくるが、JR福知山線の道場から武田尾、生瀬にかけて深い峡谷となり、先行性河川として有馬山地と六甲山地を横断する。南側には著しい支流がなく、石英粗面岩の雄大な急崖が続

表4 武庫川に係る校歌詩の例

（順不同）

歌番	武庫川を含む歌詞	学校名	歌番	武庫川を含む歌詞	学校名
1番	武庫の川辺の 狭霧は晴れて	甲東小	2番	武庫川の つきぬ流れの 歌をきけ	高木小
2番	武庫の川 たえず流れて 海に入り 世界をつなぐ	段上小	1番	武庫の川面のせせらぎに 心洗われ ここに立つ	樋ノ口小
3番	武庫の流れの 永久に変わらぬ色に	鳴尾小	2番	流れ絶えせぬ 武庫川に	小松小
1番	鮎子狭走る 武庫の川瀬	名塩小	1番	武庫川の 早瀬におどる 若あゆの	生瀬小

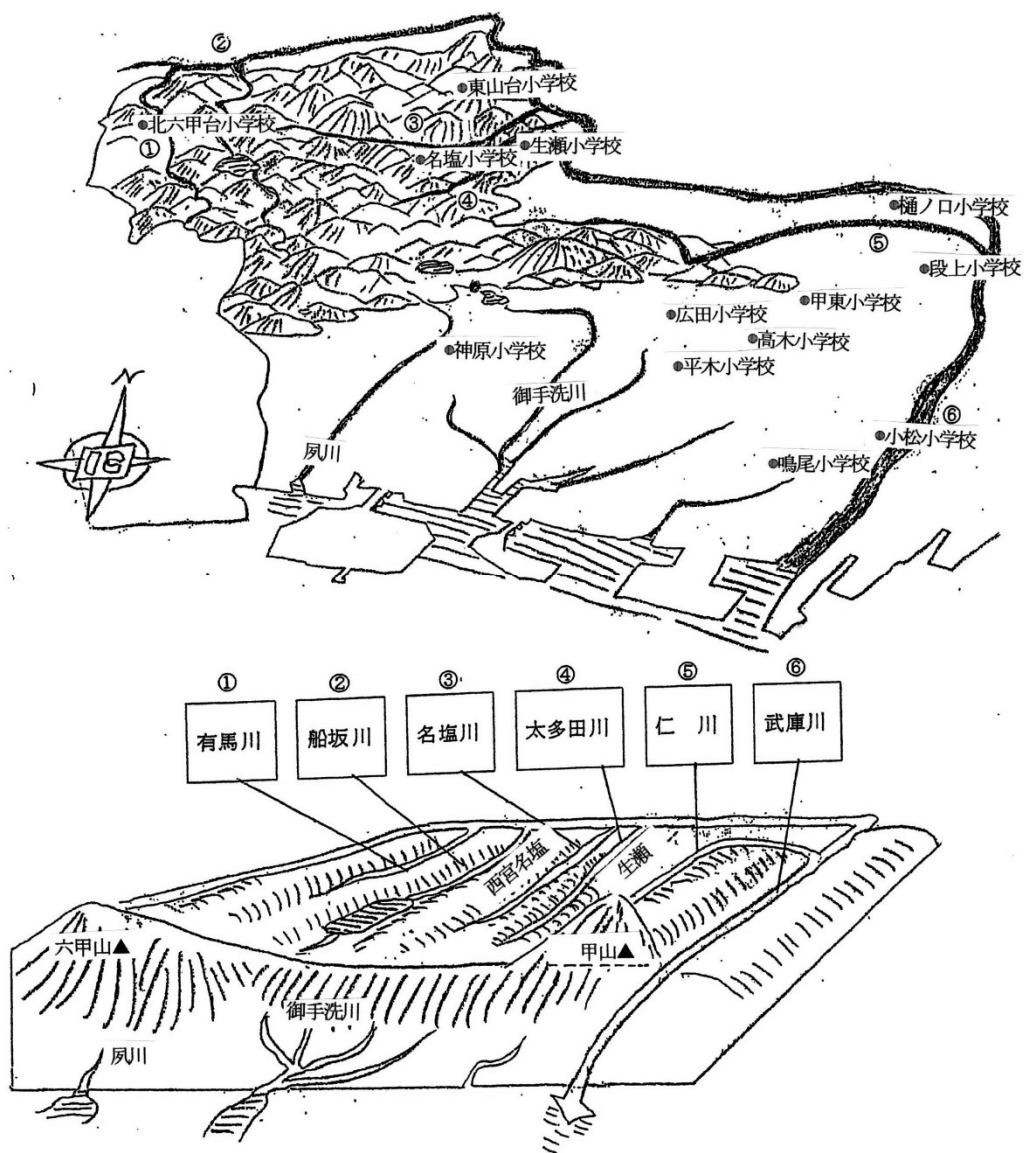


図2 西宮市立の小学校校歌にうたわれている川(古岡俊之原図)

いている。

武庫川は峡谷部の南端近くで東に向かって流れてきた名塩川をあわせる。さらに船坂付近で船坂川と分水し六甲山地と有馬山地を画して直線的に東流してきた太多田川をあわせる。太多田川は六甲衛上断層(有馬一高槻構造線)にそって流れる断層谷である。武庫川は、宝塚付近で平野部に出る。川幅も広くなり、六甲山地の東面を集水する逆瀬川・仁川が、武庫川の最後の支流である。⁽¹¹⁾ 校歌詞の例を示しておく<表4>。

(2) 御手洗川 (みたらしがわ)

[校数] 2校 (広田小, 平木小の各小学校)

御手洗川は、甲山丘陵南側の集水をして甲陽大池の北側から東川へ注ぐ。東川の源流の一つであり直接大阪湾へ注ぐ。校歌詞には、いずれもその2番に「清き想いに流れ行く 御手洗川の水のごと(広

田小)」「しづかなながれ みたらしに (平木小)」と表現されている。

(3) 夙川

[校数] 1校 (神原小学校)

1番の歌詞に「桜若葉の 夙川堤 せせらぎやがて はるかな潮路」と表現されている。

夙川は、六甲山地の前山の北山付近から南流、香櫨園で大阪湾に注ぐ。長さ7kmの小流ながら、高い川床、松・桜・カエデなどにおおわれた天井川独特の美しい風景を展開している。夙川の流す土砂は、海岸線の形に大きな影響を与えた。夙川から流れ込む土砂と海流によって、夙川の東側に砂州ができ、その上に町が生まれた。町には神が祭られ(西宮神社)、門前町、宿場町ができていった。夙川はもともと宿川という漢字が使われていた。

(4) 有馬川

[校数] 1校 (北六甲台小学校)

3番に「紅葉の流れ 有馬川」とうたわれている。

有馬川は、有馬南部の六甲の北の麓から発して、十八丁川の溪流をあわせて北流し、道場付近で有野川・八多川・長尾川と合流し、武庫川本流に注いでいる。もともと武庫川水系でなかった河川である。地質時代のある時期、六甲山系の隆起による河川争奪によって武庫川水系に属するに至ったものであると考えられている。

(5) 名塩川

[校数] 1校 (東山台小学校)

2番で「水清き名塩の川に 豊かなる伝統の郷」とうたわれている。名塩川は、東流して本流武庫川に注いでいる。先の有馬川同様もともと武庫川水系でなかった河川であるが、地質時代のある時期、河川争奪によって武庫川水系に属するに至ったものであると考えられている。

この川の名前は、作家水上勉の作品「名塩川」で一躍全国に知れ渡ることとなった。⁽¹²⁾

9 身近な環境である川

(1) 人のくらしと水

“ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世中(よのなか)にある人と栖(すみか)と、又かくのごとし”⁽¹³⁾

鎌倉時代に鴨長明が表したこの『方丈記』の冒頭文は、人生の無常を川の流れに例えたものとして有名である。このように日本の河川は、日本人の思想ともかかわりあってきた。

ゲンジボタルは、人間がその川にかかわりあう以前から生息していたはずである。彼らは生態系の中で生きていた。それが人間によって文化的環境が拡大され、河川の利用度が高められて行くにしたがい、人間とホタルとの共存の度合いは減少していった。

ホタルを観賞できること、実際に川辺に立って見られること自体、精神面での人間環境として有意義である。本質的には、たとえ都会を流れる川であっても生き物が住める状態にするよう私たちが英知をしばることの重要性を指摘したい。

では、こうした汚染をなくすのにはどうしたらよいであろうか。まずは、それぞれの汚染源で汚染

物質を出さないことに力を注ぐことである。生活排水中の界面活性剤をなくすためには、合成洗剤の代わりに粉石けんを使うことも一つの方法である。化学肥料から汚染をなくすには、できるだけ堆肥を作って使用することである。

川や海を生かすも殺すも、そして水資源を豊かにするも失うも、私たち人間の環境に対する意識や行為にかかっていることを知る必要がある。

具体的にその川の名前や流れを思い浮かべられるだけでなく、その瀬や淵のたたずまい、そこにいる魚や水生昆虫の姿が思い浮かべられなければ、改善に向けての行動にはつながらない。

これだけ下水道が整備された時代になっていても、河川の水質汚染が全くなくなったわけではない。合成洗剤は環境に悪いか、油や醤油を流したら川が汚れると思ってみても、それだけではその場限りの感情で終わってしまう。具体的に、いまここで自分が流すものが、あの川のある魚を殺す、あの水生昆虫を殺すのだと想像できなければ、人は行動に移れない。そうした意味でも、私たちはまず身近な川に行き、そこに生きる、あるいは死にかけている生き物たちの姿を知るべきである。また自然のままの川がどれほど多様性を持った生き物をはぐくんでいるかということ、身をもって知るべきである。

(2) みんなで守る「川」の自然

住みよい西宮の環境を創造していくには自然条件を総括的に把握して、自然の力をうまく利用した総合的な計画を立てる必要がある。

川の自然を守ることは、川に育てられてきた私たちの文化を守ることであり、また川の自然とともに生きることである。どちらを否定しても、私たちの生き方は貧しくなることだろう。川の自然を守ることは時にわずらわしいが、守ることによって私たちの人生は豊かになるのである。

10 小学校における環境教育の教材

環境教育に関する教材は、何か特別のものがあるのではなく、従来から日常的に利用している教材を、環境教育という視点から見直して活用していく。一見、環境教育と関係がないと思える教材も、視点を変えてみると教材化できるものがある。

まず、児童を取り巻くすべての環境が、環境教育の教材となり得る。小学校では、児童が身近な環境との直接的な触れあいや関わりを通して、豊かな心や環境意識を育むことを大切にしている。動植物の飼育栽培や観察、大地やそれを取り巻くもの（空気、山地、河川、水、土、石、雨、海、月、太陽、星など）などの自然環境との直接体験がその基本となるものである。⁽¹⁴⁾

小学校における環境教育は、児童一人一人が自分自身の周囲の様々な環境と関わりをもったり、具体的な体験をしたりするところから始まる。児童一人一人が環境に対して、興味・関心をもち、意欲的に関わり、環境に対する豊かな感受性を育むことが大切である。⁽¹⁵⁾

小学校段階の児童は、自らの生活に深く関連した身近な事象や直接体験できる具体的な事象に興味・関心をもち、問題意識をはぐくんでいく。環境保全、自然破壊、生物学的倫理などという言葉はいくら知っていても実行が伴わなければ何の意味もない。これらは究極的にはその人間の生き方にかかわることがらである。まず自然をよく知ることである。生物多様性が減り、砂漠化が進み、地球温暖化などの地球規模の環境問題を直接取り上げるのではなく、まず身のまわりの身近な事物・事象に目を向け、児童自ら問題をとらえ、考えるようにすることが大切である。

また、環境教育の視点から間接教材としての視聴覚教材がある。音楽、絵本、紙芝居、ビデオ、ス

ライドなどの多種多様な教材があるが、これらは直接体験できないことを補うという補助教材としての役割をもつだけでなく直接体験を支える教材としての価値がある。

このように、身近な環境の中での本物の直接体験と、音楽などの中での間接体験との両者をうまく取り入れながら、相乗効果を生み出すような工夫が必要である。

11 環境教育の教材としての校歌詞

校歌は、メロディと歌詞との組み合わせからなるメディアである。児童は、うたったり聞いたりすることを通して、歌詞にある自然の美しさや、自然が作り出す音など自分なりに感じたり考えたりしながらイメージ化できるという利点をもっている。⁽¹⁶⁾

朝倉は、全国の中学校への『校歌に関する調査』結果から、「校歌は、主な行事（入学式、卒業式、始業式・終業式、修了式、運動会、音楽会など）でうたわれることが多い。それは学校や地域への所属感や一体感をはぐくむことにつながるためである。それらは、在学中児童の心の糧として受け入れられると同時に、将来、心のふるさととしての価値となる。こうして、自分の学校への所属感・連帯感や郷土に対する愛情が養われる。」⁽¹⁷⁾ と述べ、校歌詞は地域性を反映し、環境教育への認識を高める上でも重要な意義を持っていることを明らかにしている。

これは、環境教育がねらう自然の美しさや大切さを感じ求める等の豊かな感受性をもつ人間形成のための素地となるものである。⁽¹⁸⁾

今まで深く考えずにうたっていた校歌が、環境意識を高めるのに役立っていたことになる。

12 山口小学校の取組

(1) 取組例 1

六甲山の北方に位置する山口小学校第3学年が、「丸山」を舞台に取り組んだ環境学習の一例を示す。本年、創立145周年を迎える本校は、市内でも最も伝統と歴史のある小学校の一つである。校歌が制定されてから40年余の歳を重ねている。1番の歌詞は次のとおりである。

友だちがいに 名をよんで 集まる楽しい 学校よ
いつも見あげる 丸山が 長い歴史を 知っている
かがやく歴史を 知っている

西宮市立山口小学校、喜志邦三作詞・樋口唱道作曲

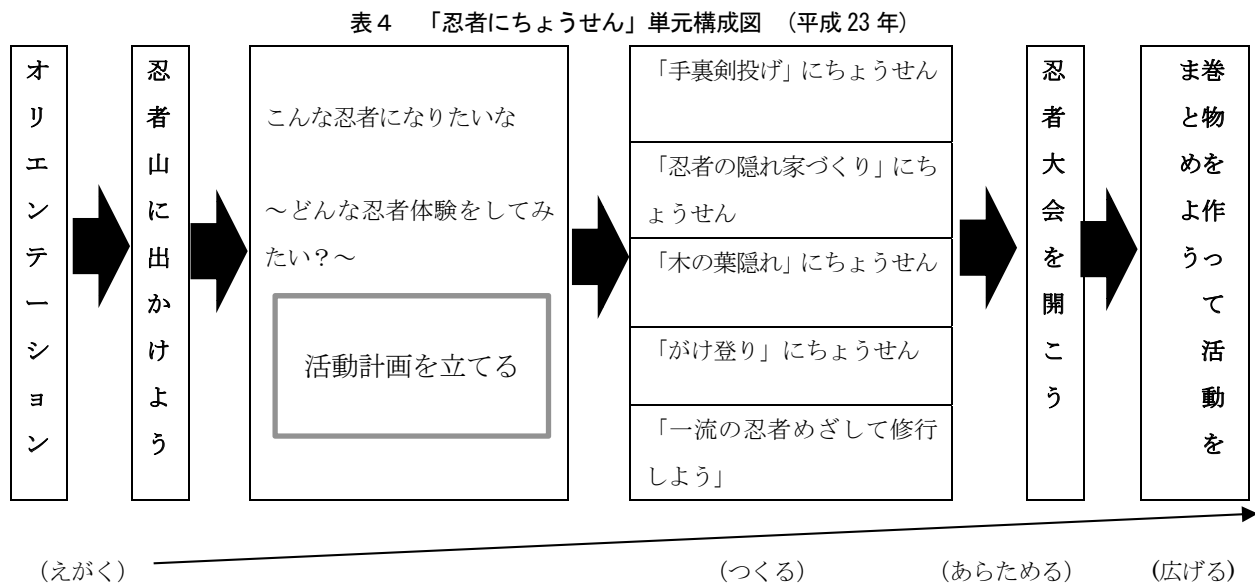
山口小の児童は校歌をよくうたう。うたうことが大好きである。全校あげて「音楽のこだまする学校にしよう」。先生方がそう言って取り組みを進めた成果であると思う。日々元気良く、音楽会などで大きな声で勢いばいうたを披露する児童に、保護者・地域から感嘆の声が上がる。

休み時間になると、学校敷地内の一部の野外アスレチック「浄川の森」⁽¹⁹⁾で、おにごっこをしたり、林の中の木々の間を駆け回ったりする児童の姿が見られる。この施設は、児童にできるだけよりよい多くの自然体験を直接体得させる目的から、保護者・地域の方々のサポートを得て設けた場である。児童たちはここで、思いきって遊ぶことができる。かつ集団遊びの要素のある「忍者にちょうせん」の活動をする。その活動を校区内にある丸山にまで広げ、遊びをさらに学習に発展させ、体験を深める。

活動のねらいは、忍者に対するイメージをふくらませ、自分や友達の思いを大切にしながら、自然

の中で、落ち葉や木の実、枯れ枝などを使って忍者が使用するものを工夫して作り出したり、忍者の修行をまねたりする喜びや楽しさを味わうことができることにある。

表4は、児童の学習活動の流れを示す単元構成図である。



第3学年 「総合的な学習の時間」学習指導計画より古岡俊之作成

「忍者にちょうせん」の活動を通して、児童たちは、次のような力を身につけてきた。

- ① 自分がしようとしていること、作ろうと思っているイメージをもつことができ、そのイメージをもとに作業を進める力
- ② 身の回りにあるいろいろな素材を活用し、工夫しながらものを作っていく力
- ③ 困ったことに出くわしたとき、友達と話し合いながら協力し、解決方法を模索していく力
- ④ みんなで決めたことは、最後まであきらめないやり通す力
- ⑤ 「丸山」のもつ自然美やその豊かさに気づき、大切にしていく力

第3学年の児童にとっては、手に負えない場面に数多く遭遇する体験学習となった。

前日雨が降って、泥んこになった。泥んこになって帰って来られる先生を、また、汗にまみれ泥まみれでぼとぼとになって帰って来る子供たちを見て、この間も教育はなされた。素晴らしい教育が…。私はそう思った。何度も壁にぶつかり、苦悩しながらも決してあきらめることなく、自分たちの目標に少しでも近づこうと試行錯誤を繰り返す彼らの中に、たくましさが見えてきた。

「子どもは行うことによるのみ理解する。」と言われる。個々の児童が、一人一人が課題をもって熱中するときに、もっともよく理解するのだと私たちは言う。聞くだけでは理解に至らない。かつては視聴覚教材、今ではパソコン（インターネット）を使ったりする。見るだけでは、覚えるけれども分かったとはいえない。こう言われている。そして私たちは、授業の中でその辺は、非常に気をつけてやってきたところである。(20)

(2) 取組例2

学校から歩いて5分ほどのところに有馬川が流れている。日本三古湯の一つ「有馬温泉」付近にそ

の源を有する。春には沿道に植えられた桜並木が人の心を癒す。

この川には、5月下旬から6月上旬にかけてゲンジボタルが乱舞する。県庁所在地神戸の街のすぐ近くの街でこうした情景が見られるのは珍しい。一時は洪水防止のための改修工事で姿を消したホタルを防災と共存した形で復活させようとした地元の人々の努力の結果である。

第3学年の総合的な学習の取り組みの一つである「有馬川からのプレゼント」は、有馬川に生きる生き物の摂理を知り、環境を守るために自分たちに何ができるかを考える学習であるが、ここでも地域の多くの人材が、各グループの自然観察の指導者として関わっている。

毎年5月には、長年有馬川の環境保全活動、ゲンジボタルの保護活動に取り組んでいる地元の専門家（通称ホタル博士）を講師に招聘して学習会を開いている。そこでは、ホタルの種類や特徴、ホタルの住みか、住みやすい環境や食べ物など写真や動画を駆使した説明から多くを学ぶ（表6）。

表6 環境学習「有馬川からのプレゼント」の単元構想例（3年）（平成23年）

オリエンテーション 環境学習体験でやってみよう 活動について話し合う	教師の願う姿	環境問題を自分たちの問題として取り組む	深刻な環境問題に気づく	身近な環境問題の実態を目と耳で感じ取る			環境問題に主体的に取り組む	活動を広める
		初めの子供の思い ・ポスターを作りホタルを捕らないように呼びかけた ・近くの有馬川の状態を確かめたい	I ホタルの住む環境について調べよう ホタルの住む環境を知りたい	II 有馬川の水を調べよう 有馬川の水の汚れについて知りたい	III 身の周りの環境を見つめよう 有馬川をきれいにしたい	IV 専門家に話を聞こう 専門家に川の環境のことを教えて欲しい	V 自分たちでできることを何かしたい	VI 活動を振り返ってまとめよう 活動をまとめ、みんなに知らせたい

（第3学年「総合的な学習の時間」学習指導計画より古岡俊之作成）

（常に問題意識を持つ）

その後は、時機を見て「ホタルを捕らないで」「有馬川を汚さないで」と川の自然環境の保護を訴えるポスターを作成する。それを山口中学校の2年生が「トライやる・ウィーク」⁽²¹⁾の活動の一環として流域に立て看板を張り巡らせるという活動がここ20年近く続いている。さらにクリーン作戦として、有馬川の清掃活動を地域の人たちと一緒にする取り組みも長く続いている。

活動に取り組むことで得た様々な学びを音楽劇にまとめ、学年音楽会や全校音楽会などで披露する。

丸山での学び、有馬川のせせらぎ、小鳥のさえずる声、草木の揺れる音。自分たちが見聞きした自然の中での様子を、ストーリーを作り、身の回りの木々や水を楽器として用い、これらを創作表現する。

このような学校の取組に対し、児童や保護者からは、「教科書ではできない勉強ができる」「心に残る授業になる」「体験することによって理解が深まる」「自分の体を通して身に付く勉強になる」など、この学習の意義にふれる言葉が多く聞かれている。

13 結語とあとがき

本研究は、西宮の公立小学校の校歌詞への山と川に関する語句の挿入について、特に地理的分布について調査したものである。

その結果、山については西宮市南部に位置する多くの小学校では六甲山をあげている。また、西宮市中部すなわち甲山周辺に位置する小学校では、甲山がそれぞれ代表する山と考えられている様子が見えてくる。いずれも地域を代表するような周囲から高く突き出した、理想として掲げるにふさわしい目立った山が取り上げられ、取り上げられる山の数は少ない。これに対して川は、身近な自然として取り上げられる傾向にあり、したがって小学校に近接した川がうたわれる。

このことから、校歌詞がいかに各学校周辺の自然地理的環境と密接な関係を持っているかがわかった。学習意欲を高め、精神的・肉体的発展と向上を目指すものとして、うたい継がれてきた校歌は、児童に校区周辺の自然環境への関心や意識を高めているものと思われる。今後は、校歌から環境意識をはぐくむという独自のテーマでの環境教育へのアプローチも進むことが予想される。

今後の課題としては、さらに校歌詞の内容を細かく分析し、環境教育の視点から校歌を位置づけ、教材としての価値を持たせていくことである。山や川に限らず、児童の身の回りの環境にわたり、自然的・人文的環境の言葉を広く求めて、人々の生活とその地域の自然・風土とが深くかかわりあっていることを環境教育に生かしていきたいと考える。

最後に、小学校における環境教育は、自然の美しさや神秘さ、環境の変化に気付かせ、身近な環境への豊かなイメージづくりや共感性、また、自分と自然、自分と他人・社会などとの関係性などをねらいとして位置づけていくべきであると考えられる。その意味から、教育に携わる者は児童の発達や状況に応じ、校歌一つにしても環境教育の視点から、独自に教材化していく能力と積極性が求められる。

(22)

引用文献

- (1) 兵庫県香美町立小代中学校 学校要覧(2006)
- (2) 兵庫県西宮市公立各小学校 学校要覧(2006)
- (3) 国立教育政策研究所教育課程研究センター 環境教育指導資料[幼稚園・小学校編] 2014, p.33
- (4) 西宮市 『西宮市史』 第1巻, 1957, pp.1-4.
- (5) 前掲書(4) pp.4-10.
- (6) 田中眞吾・中島和一 「六甲山山上の準平原と山麓の三角末端面」『ひょうごの地形・地質・自然景観』神戸新聞総合出版センター 1998, pp.46-47.
- (7) 前掲書(4) pp.26-28.
- (8) 西宮市「甲山」『西宮あれこれ—その自然と歴史—』 西宮市役所 1979, pp.1-5.
- (9) 西宮環境協会 「丸山城跡」『あるこう知ろう西宮』 1981, p.86.
- (10) 前掲書(3) p.37.
- (11) 西宮市立郷土資料館 「一、地形・気候」『西宮市立郷土資料館紀要 西宮の歴史と文化』 1985, pp.2-4.
- (12) 西宮市立名塩小学校 「紙の生産と生活」『わたしたちのふるさと わたしたちの学校』(西宮市立名塩小学校百周年記念誌) 1974, pp.102-104.
- (13) 鴨長明・市古貞次校注 「方丈記」『新訂 方丈記』岩波書店 1989, p.9
- (14) 前掲書(3) p.36.
- (15) 前掲書(3) p.33.

- (16) 川崎睦男 「4 音楽科における指導」『新学校教育全集 5 環境教育』ぎょうせい, 1996, p.130
- (17) 朝倉隆太郎 「校歌にうたわれている山—栃木県の中学校について—」『月刊社会科教育』283, 1999, pp.2-8
- (18) 太和田道雄・加藤元子・管政子・大高恵子・藤井裕士 「環境教育への気候学的アプローチ —小・中学校校歌詩と地域性—」『愛知教育大学教科教育センター研究報告』9, 1985, pp.187-197
- (19) 山口小学校 学校案内リーフレット 2010.
- (20) デューイ (宮原誠一訳) 『学校と社会』岩波書店 1996, pp.17-69.
- (21) 兵庫県教育委員会 「兵庫型「体験教育」の推進 ② 体験活動」『指導の重点』2016, pp.14-15.
西宮市教育委員会 「4 豊かな心の育成 (4) キャリア教育の充実」『西宮教育推進の方向 (すこやか・はぐくみ 学校教育推進の方向)』2016, p.73.
- (22) 古岡俊之 「西宮市立幼稚園園歌の中の山と川について」『西宮市立子育て総合センター研究紀要』第5巻第2号 2005, p.5.

参考文献

- (1) PHILIP NEAL and JOY PALMER, *Environmental Education in the Primary School*, Blackwell Education, 1990.